

「在宅」かなえる条件

白井正夫 元朝日新聞編集委員

在宅介護、在宅看取り……。いよいよ始まる介護保険時代でもキーワードになる「在宅」という言葉を考える時、なぜか「タケさんハイヤー」の話を思い出す。その情景を頭の中で思い描くと、見たこともないのに思わず笑みがこぼれる。

津軽で暮らしたタケさんは3年前、97歳で亡くなった。若い時から気丈な人で、津軽弁でいう「キカネシテ」「根性イグネ」の人だった。90歳代になっても食事、洗面、手洗いは自分でしていたが、風邪をこじらせたことから体力がガクンと落ちて、晩年の2年間は半分寝たきりになった。同居する70歳代の長男夫婦に介護されながら自宅で暮らし、看取られた。

この町では毎年、老人クラブ主催で「老年の主張」発表会がある。十数年続く名物行事である。1996年の発表会で、長男が「老親とともに」と題して真っ最中の介護体験を話した。とつとつとした発表の中で、さりげなく語られたエピソードが「タケさんハイヤー」である。

長男はありふれた日常を語った。96歳の母はご飯を自分で食べられること。しかし、おむつをしており、昼夜、妻とお下の世話をすること。朝の床でおしりを持ち上げるおむつ交換、寝たまの体を動かす着物の着せ替えが一番辛く難儀なこと。夫婦共同ですが70歳を超えた身には重労働で、妻は肩が

痛いなどを訴えている。朝、着替えを終えると、タケさんは寝床から隣の居間に移り、こたつにはいる。拡大鏡で新聞の見出しをながめ、テレビに目をやったり。でも、一日のほとんどを寝ながら過ごし、夕方6時に夕飯を食べると床に戻る。

■ 老々介護を支えた ■ 一瞬のユーモア

寝床と居間のこたつの距離はわずか4mなのに、老親を移動させるのが大仕事になる。抱いていくのも、おぶっていくのも難儀。そこは生活の知恵で、玄関マットに母をピョンコンと座らせて、さあーっと引く方法がうまくいった。いつの間にか、家族で「タケさんハイヤー」と呼ぶようになった。「おばあちゃん、車がきたヨ」。声をかける運転手役は長男である。

もうお気づきと思うが、長男の体験発表にはホームヘルパーが登場してこない。タケさんが住む津軽の大きな町は在宅介護の24時間巡回サービスを95年から始めるなど高齢者介護の取り組みには熱心な町だが、長男は公的な介護サービスを利用しないで、家族だけで世話をしていた。

民生委員はヘルパー利用を説き、週1回往診にくる医者には「寝たきりにしておくより、デイサービス施設に通わせの方が体も心も今よりずっと良いのではないですか」と助言してくれた。長男

夫妻は断り続けた。「自分の居間で、テレビを見たり、好きなものを食べて自然のままに過ごさせた方が本人のためが一番安らぐと思う」というのである。お役所の世話になることや、ヘルパーに家に入られるのが嫌なのではない。その証に、亡くなる前の短期間は訪問ヘルパーを利用している。自分たちで、のこだわりも家族と24時間共にいる老親の喜びを長男夫婦も感じていたからだと思う。

自宅で介護、それも家族だけの老々介護となると、きれいごとではすまないことは容易にわかる。厳しい状況の中で在宅介護を可能にしたのは何だろうかと考えると、「タケさんハイヤー」のユーモアを見逃せないと、思う。24時間の中でわずか1、2分のほほ笑みタイム。一日の苦労が吹き飛ばし一瞬だったのではないかと。

「在宅」がかなう目に見えない条件を考えさせられた話をもう1つ。

ヘルパーになって3年、柳田正子さんは8月号の小欄でもふれた東京都町田市の社会福祉法人、創和会の「ケアセンター成瀬」の非常勤職員である。ここで介護の経験を積んだボランティアの主婦たちが昨年暮れ、「アップル・ホームヘルプサービス」をつくり、ミニデイとヘルパー派遣で有償の在宅支援活動を展開している。柳田さんもメンバーの一員だ。

アップルサービスの利用者に今春、90歳で亡くなったBさんがいた。妻と2人暮らしのBさんは終末期を自宅で過ごし、柳田さんもヘルパーとして初めて「在宅看取り」に関わった重い体験となった。

「成瀬」のデイセンターでよく将棋を楽しんでいたBさんがおむつをつけるようになり、昨年夏から自宅の訪問介護も利用するようになった。それでも車いすで週2回、デイセンターを利用していたが、昨年暮れ肺炎で入院した。今年2月に退院し、「自宅で最期を終えたい」という本人の選択に、家族も同意して、自宅でBさんを支える態勢が「成瀬」で組まれた。主治医の往診、週2回の訪問看護、そして「アップル」の巡回型介護サービス。この訪問介護は毎日

午前9時から午後9時までの間に4回で、それぞれ30分。5人のヘルパーでチームを組んだ。柳田さんが担当したのは水曜日午後1時、木曜日午後1時、5時、金曜日午前9時だった。

■「時間」の制約 ■ 介護保険でどう克服

訪問介護から亡くなるまで8か月の関わりだった。柳田さんはふりかえって「父と接する気持ちで楽しく仕事をさせてもらいました。しかし、退院から亡くなるまでの終末の1か月は、私たちヘルパーも家族に近い気持ちになり、毎日が真剣勝負でした」と話してくれた。

訪問介護は1回が30分。その時間におむつ交換と体ふき、食事時間なら食べる手伝いもする。Bさんの体調や気持ちを考えれば、物を動かすように体を右に左に動かし、ひっくり返してと事は運べない。特に食事や水分補給は高齢者特有のたんとの戦いとなる。のどにからんだたんをとらなければ、水だって容易に飲み込めない。せき込む背中を軽くたたき、さすっては、ゆっくりゆっくり。決められた1回の介護時間の30分間はあっという間に過ぎていく。

ヘルパー身分のもどかしさに、悔しさを感じる出来事も起こった。たん取りは口や鼻に管を入れる吸引器を使えば比較的容易だが、たん吸引は医師法で医療行為とされている。訪問先でたんで苦しむ高齢者がいても、ヘルパーは看護婦資格はないから吸引器を使うことを禁じられている。ヘルパー身分を嘆きながら、訪問看護ステーションにSOSの電話をいれる。それでも看護婦さんが駆けつけるまで放っては帰れない。Bさんもヘルパーの機敏な判断で、思わぬ危機状態を脱したことがあったという。

終末期介護は活動の時間、量を予想を超えて上回った。柳田さんは「私たちは家族の心情に近い状態で、共に悩み、共にがんばろう気分でした。30分が15分、20分と延びるのは何回もありました」と話した。医師、看護婦、ヘルパーの中で、接する時間はヘルパーが

最も長かった。そして、自分の体験から「公的サービスのよう決められた時間どおりに、次の家、次の家と追われて飛ぶ渡り鳥ヘルパーでは終末期の在宅介護に十分な対応はとても難しいのでは……」と、介護保険サービスのもので在宅介護、在宅看取りに不安を感じたという。

柳田さんは当時、Bさんの他には痴呆症女性の介護が週1回、老夫婦の生活介助が2週に1回入っているだけだった。発足して間もない「アップル」の利用者が少なかったこともあって、Bさんの介護に使う時間に余裕があったことを素直に喜んでいた。

駆け込み介護保険らしく、サービスを提供する事業者に支払う介護報酬の仮単価が8月下旬ようやく決まった。厚生省によると、正式決定は来年1月だという。

仮単価は、ヘルパーがお年寄りの家を訪ねて入浴や食事の世話をする身体介護は30分～1時間未満で4020円、掃除などの家事援助1530円である。現行制度と比べて、身体介護で290円、家事援助で70円高く設定されている。来年4月実施に迫ったのにサービス提供態勢が整わないと困るので、民間業者がもっと参加してくるよう高い設定にしたのだという。

■ 態勢不十分なら ■ 問題のたまり場に

介護保険は施設介護、在宅介護の2本立てだが、日本の近未来の状況を考えれば、どれだけ「在宅」を推進、支援できるかがカギになる。仮単価額の設定にも、在宅態勢への不安が現れているが、事業者の数がそろって、ヘルパーが忙しく日本中を走り回ればいいのか、となる。

住民に配られる介護保険のパンフレットを開くと、受けられる在宅サービスとして訪問介護、通所介護から住宅改修費支給まで12項目が並ぶ。これを見ると「ユーモアが入っていないぞ」「ハートが入っていないぞ」とつぶやいてしまう。やぶにらみは承知である。でも、メニューからは見えない所に「在宅」の成否をにぎる条件が潜んでいるの

ではないか、と真剣に思うようになった。

日本看護協会の常任理事、生田恵子さんはいま、「共に在宅ケアを考える会」をつくり、地域活動する仲間と毎月勉強会を開いている。「在宅」を生活者の目で見つめ直す必要を感じているからだ。例えば、医療費削減策→早期退院という社会的な要請から、体が弱い人が「在宅」に追い込まれる現象がすでに現れている。この在宅に適正な支援がないと、「在宅」という美名のもとで問題のたまり場になるおそれがある、と指摘する。

生田さんは東京都の保健婦時代に、在宅の重度障害児・者の訪問事業(1982年スタート)を手がけた経験がある。そのころ施設入所できずに待機児として家にいた重度心身障害児が約600人いたという。生田さんによれば、在宅といっても放りっぱなしの悲惨な状態で、保健婦が訪問先で目にしたのは障害児を寝かしぱなしにして腐った布団であり、リハビリしないまま固定した手足の障害だった。

生田さんは経験をもとに、「家を訪ねてマニュアルどおりではすまない。母親によい介護をしてもらうには、流しの衛生にまで目をやって、介護するのに気持ちよい家の環境整備から必要になる。保健婦、ヘルパーが家族と一緒に流しのくす入れ掃除までする気持ちがないと、在宅介護、在宅支援は成り立たない」とまでいう。

20年ほど前によく実現した東京の重度障害児・者の訪問事業で、障害児がいる「在宅」の様子は劇的に変わったといわれる。それだけ障害者が在宅の名の下で暗い社会に置き去りになっていたわけだ。生田さんは、これから増えるであろう在宅高齢者がかつて障害児が歩んだ道をたどらなければいいのだが、と心配している。もうそんな時代ではない、と笑い飛ばせるといいのだが。